

なめとこ山の熊

宮沢賢治

なめとこ山の熊のことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ。淵沢川はなめとこ山から出てくる。なめとこ山は一年のうちたいの日は冷たい霧か雲かを吸ったり吐いたりしている。周りもみんな青黒いなまこや海坊主のような山だ。山のなかごろに大きな洞穴ががらんとあいている。そこから淵沢川が、いきなり三百尺ぐらいの滝になって、ひのきやいたやの茂みの中をごとと落ちてくる。

中山街道はこの頃は誰も歩かないから、藪やいたどりがいっぱいに生えたり、牛が逃げて登らないように柵を道に立てたりしているけれども、そこをさがさ三里ばかり行くと向こうの方で風が山の頂を通っているような音がする。気をつけてそっちを見ると、なんだかわけのわからない白い細長いものが山を動いて落ちて煙を立てているのがわかる。それがなめとこ山の大空滝だ。そして昔はその辺には熊がごちゃごちゃいたそう。本当はなめとこ山も熊の胆も私は自分で見ただけではない。人から聞いたり考えたりしたことばかりだ。間違っているかもしれないけれども私はそう思うのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆は名高いものになっている。

腹の痛いにも効けば傷も治る。鉛の湯の入り口になめとこ山の熊の胆ありという昔からの看板もかかっている。だからもう熊はなめとこ山で赤い舌をべろ吐いて谷を渡ったり、熊の子

供らが相撲をとっておしまい。ほかほか殴り合ったりしていることは確かだ。熊捕りの名人の淵沢小十郎がそれを片っ端から捕ったのだ。

淵沢小十郎は赤黒いごりごりしたおやじで、胴は小さな白ぐらいはあったし、てのひらは北島の毘沙門さんの病気を治すための手形ぐらい大きく厚かった。小十郎は夏なら菩提樹の皮でこさえたけらを着てはんばきを履き、生蕃の使うような山刀とホルトガル伝来というような大きな重い鉄砲を持って、たくましい黄色な犬を連れて、なめとこ山からしどけ沢から三つ又からサツカイの山からマミ穴森から白沢から、まるで縦横に歩いた。木がいっぱい生えているから、谷を登っているとまるで青黒いトンネルの中を行くようで、ときにはぼつと緑と黄金色に明るくなることもあれば、そこら中が花が咲いたように日光が落ちていこともある。そこを小十郎が、まるで自分の座敷の中を歩いているというふうで、ゆっくりのっしとやって行く。犬は先に立って崖を横ばいに走ったり、ぎぶんと水に駆け込んだり、淵ののろろした気味の悪いところをもう一生懸命に泳いでやっと向こうの岩に登ると、体をぶるぶるとして毛を立てて水をふるい落とし、それから鼻をしかめて主人の来るのを待っている。小十郎は膝から上にまるで屏風のような白い波を立てながら、コンパスのように足を抜き差しして口を少し曲げながらやってくる。そこであんまりいっぺんに言ってしまうと悪いけれども、なめとこ山あたりの熊は小十郎を好きなのだ。その証拠には、熊どもは小十郎がぼちゃぼちゃ谷をこいだり、谷の岸の

細い平らないっぱいにあぎみなどの生えているところを通るときは、黙って高いところから見送っているのだ。木の上から両手で枝にとりついたり崖の上で膝を抱えて座ったりして、おもしろそうに小十郎を見送っているのだ。全く熊どもは小十郎の犬さえ好きなようだった。けれどもいくら熊どもだって、すっかり小十郎とぶっつかって、犬がまるで火のついたまりのようになって

3【なまこ】海底にすむ、ヒトデやウニの仲間。筒のような形で柔らかい。

3【海坊主】海面から立ち現れると恐れられた、坊主頭の怪物。

4【三百尺】一尺は約三〇・三センチメートル。

4【いたや】イタヤカエデの略。

6【いたどり】山野に自生する植物。山菜の一種。

7【三里】一里は約三・九メートル。

10【熊の胆】胆汁(消化液)を含んだままの熊の胆嚢(肝臓の下にある器官)を乾燥させたもの。苦みが強く、薬になる。

4【毘沙門さん】毘沙門天。七福神の一人。

4【菩提樹】ぼだいじゆ。シナノキ科の木。マダは東北地方の方言。

5【けら】蓑(カヤヤスゲを編んで作った雨具)の方言。

5【はんばき】脚絆(足を保護し、動きやすくするため)にすねに巻く布)の方言。

5【生蕃】台湾の先住民。第二次世界大戦前に日本が統治していた頃の呼び名。

16【こいだり】「こぐ」は、雪の中ややぶの中をかきわけに進むこと。

17【あぎみ】野草の一つ。葉がぎざぎざで、縁にとげがある。春から秋にかけて赤紫の花が咲く。

飛びつき、小十郎が目をまるめて変に光らして鉄砲をこっちへかまえることは、あんまり好きではなかった。そのときはたいいていの熊は迷惑そうに手を振ってそんなことをされるのを断った。けれども熊もいろいろだから、気の激しいやつならごうほえて立ちあがって、犬などはまるで踏み潰しそうにしながら、小十郎の方へ両手を出してかかっていく。小十郎はびったり落ちていて木を盾にして立ちながら、熊の月の輪を目がけてズドンとやるのだった。すると森までがあつと叫んで熊はどたと倒れ、赤黒い血をどくどく吐き鼻をくんくん鳴らして死んでしまうのだった。小十郎は鉄砲を木へ立てかけて注意深くそばへ寄ってきて、こつ言うのだった。「熊。俺はてめえを憎くて殺したのでねえんだぞ。俺も商売ならてめえも撃たなけあならねえ。他の罪のねえ仕事していんだが、畑はなし、木はお上のものに決まったし、里へ出ても誰も相手にしねえ。しかたなしに獵師なんぞしるんだ。てめえも熊に生まれたが因果なら俺もこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生まれなよ。」

そのときは犬もすっかりしよげ返って目を細くして座っていた。

なんせこの犬ばかりは、小十郎が四十の夏、うち中みんな赤痢にかかってとうとう小十郎の息子とその妻も死んだ中に、ぴんぴんして生きていたのだ。

それから小十郎は懐から研ぎすまされた小刀を出して、熊の顎のどこから胸から腹へかけて皮をすうつと裂いていくのだった。それからあとの景色は僕は大嫌いだ。けれどもとにかくおしまい、小十郎が真っ赤な熊の胆を背中の中の木のひつに入れて、血で毛がぼとぼと房になった毛皮を谷で洗ってくるくる丸め、背中にしよって、自分もぐんなりしたふうで谷を下っていくことだけは確かなのだ。

小十郎はもう熊の言葉だつてわかるような気がした。ある年の春早く、山の木がまだ一本も

青くならない頃、小十郎は犬を連れて白沢をずうつと登った。夕方になって小十郎は、ぼっかい沢へ越える峰になった所へ、去年の夏こさえた笹小屋へ泊まろうと思つてそこへ登つていった。そしたらどういふかげんか小十郎の柄にもなく登り口を間違つてしまった。

なんべんも谷へ下りてまた登り直して犬もへとへとに疲れ、小十郎も口を横に曲げて息をしながら、半分崩れかかった去年の小屋を見つけた。小十郎がすぐ下に湧き水のあったのを思い出して少し山を下りかけたら、驚いたことは母親とやつと一歳になるかならないような子熊と二匹、ちょうど人が額に手をあてて遠くを眺めるといったふうに、淡い六日の月光の中を、向こうの谷を上げしげ見つけているのに会つた。小十郎はまるでその二匹の熊の体から後光がさすように思えて、まるで釘付けになつたように立ち止まってそつちを見つめていた。すると小熊が甘えるように言ったのだ。「どうしても雪だよ、おっかさん、谷のこつち側だけ白くなっているんだもの。どうしても雪だよ。おっかさん。」すると母親の熊はまだしげしげ見つけていたが、やつと言つた。「雪でないよ、あすこへだけ降るはずがないんだもの。」子熊はまた言つた。「だから溶けないで残つたのでしよう。」「いいえ、おっかさんはあざみの芽を見に昨日あすこを通つたばかりです。」小十郎もじつとそつちを見た。

月の光が青白く山の斜面を滑っていた。そこがちよど銀の鏡のように光っているのだった。しばらくたつて子熊が言つた。「雪でなけあ霜だねえ。きつとそつだ。」本当に今夜は霜が降るぞ、お月さまの近くで胃もあんなに青く震えているし、だいいちお月さまの色だつてまるで氷のように、小十郎が一人で思つた。「おかあさまはわかつたよ、あれねえ、ひきぎくらの花。」「なあんだ、ひきぎくらの花だい。僕知つてるよ。」「いいえ、おまえまだ見たことありません。」「知つてるよ、僕この前とつてきたもの。」「いいえ、あれひきぎくらでありませぬ、おまえとつてきたもの

9【お上】政府や役所を敬つていう語。

17【ひつ】蓋が上に開く大形の箱。

2【笹小屋】笹で作つた粗末な小屋。

7【六日の月光】新月の翌日から数えて六日目の月の光。

17【胃】牡羊座の四十一番星とその付近の小さな星を指す。

18【ひきぎくら】コブシ(山野に生え、白い花をつける木)の方言。モクレン科。

きささげの花でしよう。」「そうだろうか。」子熊はとぼけたように答えました。小十郎はなぜかもう胸がいっぱいになって、もういっぺん向こうの谷の白い雪のような花と、余念なく月光を浴びて立っている母子の熊をちらっと見て、それから音をたてないようにこっそりこっそり戻り始めた。風があっちへ行くな行くなと思いつながら、そろそろと小十郎は後ずさりした。くろもじの木の匂いが、月の明かりと一緒にすうっとさした。

5

ところが、この豪儀な小十郎が町へ熊の皮と胆を売りに行くときのみじめさといったら、全く気の毒だった。

町の中ほどに大きな荒物屋があって、笹だの砂糖だの砥石だの金天狗やカメレオン印のたばこの、それからガラスの蠅捕りまで並べていたのだ。小十郎が山のように毛皮をしょってその敷居を一足またぐと、店ではまた来たかというようにうす笑っているのだった。店の次の間に大きな唐金の火鉢を出して、主人がどっかり座っていた。

10

「旦那さん、先頃はどうもありがとうございます。」

あの山では主のような小十郎は、毛皮の荷物を横に下ろして丁寧な敷板に手をつけて言うのだった。

15

「はあ、どうも、今日はなんのご用です。」

「熊の皮また少し持ってきました。」

「熊の皮か。この前のもまだあのまましまつてあるし、今日あまんついています。」

「旦那さん、そう言わないでどうか買ってくださいなさい。安くてもいいです。」

「なんぼ安くてもいらないです。」主人は落ち着きはらってきせるをたんたんとてのひらへたた

くのだ。あの豪儀な山の中の主の小十郎は、こう言われるたびにもうまるで心配そうに顔をしかめた。なんせ小十郎のどこでは山には栗があったし、後ろのまるで少しの畑からは稗がとれるのはあったが、米などは少しもできず味噌もなかったから、九十になる年寄りと子供ばかりの七人家内に持っていく米は、ごく僅かずつでもいったのだ。

5

里の方のものなら麻も作ったけれども、小十郎のどこでは僅か藤つるで編む入れ物の他に、布にするようなものはなんにもできなかったのだ。小十郎はしばらくたってから、まるでしわがれたような声で言ったもんだ。

「旦那さん、お願いできます。どうがなんぼでもいいはんで買ってこない。」小十郎はそう言いながら改めておじぎさえしたもんだ。

10

主人は黙ってしばらく煙を吐いてから、顔の少しでにかにか笑うのをそっと隠して言ったもんだ。

「いいいます。置いてお出れ。じゃ、平助、小十郎さんき二円あげろじゃ。」店の平助が大きな銀貨を四枚小十郎の前へ座って出した。小十郎はそれを押したくようにしてにかにかしながら受け取った。それから主人は今度はだんだん機嫌がよくなる。「じゃ、おきの、小十郎さんさ一杯あげる。」小十郎はこの頃はもううれしくてわくわくしている。主人はゆっくりいろいろ話す。小十郎はかしまって山の模様やなにか申しあげている。まもなく台所の方からお膳できたと知らせる。小十郎は半分辞退するけれども、結局台所のどこへ引っぱられてまた丁寧な挨拶をしている。

15

まもなく塩引きの鮭の刺し身やいかの切り込みなどと酒が一本、黒い小さな膳に載ってくる。

小十郎はちゃんとかしまつてそこへ腰かけて、いかの切り込みを手の甲に載せてべろりと

20

1 【きささげ】ノウゼンカズラ科の木。

4 【くろもじ】クスノキ科の木。山地に生え、枝葉は香りがいよいい。

6 【豪儀】威勢のよいさま。

8 【荒物屋】日用品の雑貨を売る店。

11 【唐金】青銅のこと。中国から製法が伝わった。

11 【火鉢】灰を入れ、中に炭火などを置いておく暖房器具。

17 【今日あまんついています】今日は、まず、いいです。

19 【きせる】刻みたばこを吸うときに使う、和風のパイプ。

2 【稗】イネ科の一年草。

5 【藤】山野に生え、庭にも植えられる、つる性の木。薄紫の花が房になって垂れ下がる。

19 【塩引きの鮭】塩鮭。

19 【切り込み】塩辛。

目を上げてちょっと小十郎を見て、なにか笑うか泣くかするような顔つきをした。小十郎はわらじを結わえてうんとこきと立ちあがって出かけた。子供らはわかるがわる厩の前から顔を出して「爺さん、早くお出や。」と言って笑った。小十郎は真っ青なつるつるした空を見上げてそれから孫たちの方を向いて「行ってくるじやい。」と言った。

小十郎は真っ白な堅雪の上を、白沢の方へ登っていった。

犬はもう息をはあはあし、赤い舌を出しながら走っては止まり走っては止まりして行った。まもなく小十郎の影は丘の向こうへ沈んで見えなくなってしまい、子供らは稗の藁でふじつきをして遊んだ。

小十郎は白沢の岸を登っていった。水は真っ青に淵になったり、ガラス板を敷いたように凍ったり、つららが何本も何本も数珠のようになってかかったり、そして両岸からは赤と黄色のまゆみの実が、花が咲いたようにのぞいたりした。小十郎は自分と犬との影法師がちらちら光り、樺の幹の影と一緒に雪にかっきり藍色の影になって動くのを見ながら登っていった。

白沢から峰を一つ越えたところに一匹の大きなやつがすんでいたのを、夏のうちにたずねておいたのだ。

小十郎は谷に入ってくる小さな支流を五つ越えて、なんべんもなんべんも右から左、左から右へ水を渡って登っていった。そこに小さな滝があった。小十郎はその滝のすぐ下から長根の方へかけて登り始めた。雪はあんまりまばゆくて燃えているくらい、小十郎は目がすっかり紫の眼鏡をかけたような気がして登っていった。犬はやっぱりそんな崖でも負けないというように、たびたび滑りそうになりながら、雪にかじりついて登ったのだ。やっと崖を登りきったら、そこ

はまばらに栗の木の生えたごく緩い斜面の平らで、雪はまるで寒水石というふうにギラギラ光っていたし、周りをずうっと高い雪の峰がよきよき突っ立っていた。小十郎がその頂上で休んでいたときだ。いきなり犬が火のついたようにほえだした。小十郎がびっくりして後ろを見たら、あの夏に目をつけておいた大きな熊が、両足で立ってこっちへかかってきたのだ。

小十郎は落ち着いて足を踏んばって鉄砲をかまえた。熊は棒のような両手を上げてまっすぐに走ってきた。さすがの小十郎もちょっと顔色を変えた。

ぴしゃというように鉄砲の音が小十郎に聞こえた。ところが熊は少しも倒れないで嵐のように黒く揺らいでやってきたようだった。犬がその足もとにかみついた。と思うと小十郎はがあとと頭が鳴って、周りが一面真っ青になった。それから遠くでこういう言葉を聞いた。「お小十郎おまえを殺すつもりはなかった。」もう俺は死んだと小十郎は思った。そしてちらちらちらら青い星のような光がそこら一面に見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、許せよ。」と小十郎は思った。それからあとの小十郎の心持ちはもう私にはわからない。とにかくそれから三日めの晩だった。まるで氷の玉のような月が空にかかっていた。雪は青白く明るく、水は燐光をあげた。すばるや参の星が緑や橙にちらちらして、呼吸をするように見えた。

その栗の木と白い雪の峰々に囲まれた山の上の平らに、黒い大きなものがたくさん環になって集まって各々黒い影を置き、回々教徒の祈るときのようにじっと雪にひれ伏したまま、いつまでもいつまでも動かなかった。そしてその雪と月の明かりで見ると、いちばん高いところに、小十郎の死骸が半分座ったようになって置かれていた。

2【厩】馬小屋。

5【堅雪】春、溶けかかった雪が夜間に冷えて堅く凍りついたもの。

7【ふじつき】子供の遊び。藤の枝を地面にまいて三角形などを作り、その中に入るだけの藤の束を立てて、その数を競う。

11【まゆみ】ニシキギ科の木。紅葉が美しい。

16【長根】山の峰続き。

1【寒水石】大理石の石材の一つ。白色または暗い灰色

で、多くは緑灰色のしま模様がある。

15【燐光】酸化したリンが放つ青白い光。

15【すばる】プレアデス星団の日本古来の呼び名。

15【参の星】オリオン座の中央部にある三つの星。

18【回々教徒】イスラム教徒。

思いなしか、その死んで凍こえてしまった小十郎こじゅうろうの顔はまるで生きてるときのように冴さえ冴さえして、なにか笑っているようにさえ見えたのだ。本当にそれらの大きな黒いものは、参しんの星が天のまん中に来て、もっと西へ傾かたむいても、じっと化石したように動かなかった。

〈出典 『宮沢賢治全集7』（筑摩書房、一九八五年）〉

【著者】 宮沢賢治（みやざわ けんじ）

一八九六（明治二九）年—一九三三（昭和八）年
詩人。童話作家。岩手県の生まれ。

【著書】 『銀河鉄道の夜』 『春と修羅』 『風の又三郎』 など